

# 養育里親

～もうひとつの家族～

11

坂口 伊都

## 生活を共に送る

子どもが我が家で暮らすことを決めてくれ、一緒に生活を共に送るようになって約 3 か月が経ちました。毎日毎日、生活の中にこの子がいることが、不思議なような当たり前になりつつあるような感じがします。

生活が始まった頃は、いろいろな手続きをしなければならず、何が何やらわからないままバタバタと過ごしていました。この子にできるだけ負担がかからないように試行錯誤しながらのスタートでしたが、思っていた以上にこの子がいろいろな事柄にチャレンジをしてくれ、伸びしろの大きさを感じましたし、それは嬉しい発見でした。

中途養育では、親子が生活を共にしてから 3

か月は、子どもが緊張していていい子でいるので、やりやすい子と感じるが、この 3 か月が済むと子どもの試し行動等が出てきて大変になると聞きます。我が家は、ちょうどこの 3 か月にあたりますが、この期間でも感情が揺さぶられています。

以前に、夜になるとなかなかテンションが上がって寝つけないでいると書きましたが、それは生活が始まってからも続き、学校が始まると何とか寝かせなければと焦りだしました。相変わらず、背中をトントンすることは嫌がられません。この子は、寝る時間帯になると話をしたがるのですが、話をしていると永遠に眠らないのではないかという勢いなので、仕方なくできるだけ刺激を減らしていきます。電気を消して、隣で寝たふりをしてしていると、その内にこの子がスースーと寝だすので、この子に話しかけられ

ても、隣で寝たふりをすることになります。そんなことをしている自分を意地悪ばあさんのようだと感じて、自分自身が嫌になります。この方法で本当にいいのかなあと悩みました。

何故、この子はお風呂辺りから元気になっていくのだろうか？あまりテンションを上げないように気をつけて入浴するようにしたり、電気を豆球にしたり、真っ暗にしたりとしてみました。どれもじっくりときません。この子は夜になると不安を感じているのか、児童養護施設とは違いがあるのだとしたら何だろうか考えました。そして、この子に話そうと決めました。

「あのな、夜はみんな寝るための準備をしているんだよ。遅くまで起きてるのは、いいことではないの。ずっと起きていたければ起きていればいいけど、パパもママも兄ちゃんも姉ちゃんも夜は寝たいからあなたに付き合うことはできないからね。起きていたければ一人でそれをしないとね。あなたが、寝ようとしてくれるなら一緒にいれるし、一緒に寝れるよ。パパもママも兄ちゃんも姉ちゃんもいなくなるからね。そばにいるからね。心配しなくても大丈夫だよ。」

そんな話をして、数日経ってからこの子が入浴後「さあ、寝る準備でもしようかな」と言い出して、布団にもぐりはじめました。この子は、しっかり話を聞いていて、時間をかけてゆっくりと自分の中に落とし込んでいったのだと感心しました。今は、9時になったら寝る準備の時間という我が家ルールができました。休みの前の日は、寝る時間が遅くなってもいいというおまけつきですけど。生活を始めてからしばらくは、寝かしつけることの位置づけが大きかったです。気がつけば犬を抱えて寝ているという日も出てき始めるようになりました。

今回は、この試行錯誤の生活の中で感じたことや戸惑ったことを率直に書いていこうと思います。その中には、人として未熟な部分を晒す

形になると思いますが、実際に養育里親を体験して気づいた部分なので、お許しください。最後までおつきあいいただければ幸いです。

## 中途養育

子どもを途中から養育するということは、当たり前ですが、出会う以前が全く見えません。それは、真っ黒な穴があいているかのようです。これは、養育里親だけでなく、ステップファミリーや児童虐待等で家庭分離しその後家庭に戻った家族も同様のことが言えると思います。この子のよくわからない時期がありながら、生活をしていく難しさです。

養育里親は、そこにプラスで関係の希薄さがあります。以前、子どもを生んだ時に逃れられない事をしてしまったと感じました。ここにいる赤ん坊を育て、親として責任を負って生きるのだと思ったら、何かとんでもない重責を背負ってしまったような気がしたものです。養育里親も、親としての責任を負うことには変わりありませんが、実子の逃れられなさとは逆に、この子を失わないようにしていかなければならないという危機感で気が引き締まります。里親不調に陥っていけば、一緒に生活していけなくなる可能性が高くなります。里親不調になりたいとは思いませんが、ならない保証もありません。生物学的にも戸籍にも拠り所がない儂くて危うい関係性なのです。仮に里親不調になり、この子がまた別の養育里親や児童養護施設に入所することになれば、この子がとても傷つく結果になります。自分はダメな子だと感じてしまうかも知れませんが、誰も信用できないと人間不信に陥ってしまう可能性もあります。子ども自身が傷つくのであれば、何のための養育里親なのだろうと思います。

養育里親は、子どもの小さい頃が見えない、

わからないという現実がいつも隣にあるので、親子になっていくのも実子とは違う道のりが要るのかもしれないと実感しているところです。いつか、この子のライフストーリーワークと一緒にできればと思っています。この子が育ってきた道筋を辿っていく同士になれるのであれば、知らないという現実にも意味があると思えてきます。

出産してからの子育ては、夜泣きに泣かされたりしながらも阿吽の呼吸や波長を親子で作ってあげてきました。10歳から始まる子育ては、10歳の意思を持った子どもとそれを作り出す作業になります。赤ん坊は、自分の力だけでは生きていけない、生き抜くためには大人の力が必要となる時期ですから、大人が向ける波長に子どもが合わせていく率が多くなりますが、10歳からだとお互いに背負ってきた生活文化の違いを目の当たりにします。例えて言うのなら、結婚当初の生活に似ているのかもしれませんが、お互いに当たり前だと思って過ごしてきた何気ない事柄に違いを感じ戸惑います。この子も何かを感じているのでしょうか。その中で、いろいろな反応を出し始めているのだと思います。

この子は、一緒に遊ぶことは上手にしますが、しんどさや寂しさ、怖さを訴えてくることはほとんどしません。例えば、咳をし始めているので額に手をあてようとすると、手を払って嫌がります。「咳をしているでしょ」と言えば、「していない」と言い張り、自分に注目されないように頑張ります。視線が合えば、視線をそらしたり、手で顔を覆って隠したりして見ないでというしぐさをします。

触られることを嫌がる理由がよくわかりません。触れること自体が嫌なのかといえば、自分から身体をくっつけてきたり、手を引っ張りにきたりし始めているので、そうではないようです。どちらかといえば、他者が自分に向かって触りにくるのを嫌がっているようです。頭を撫

でたり、背中をトントンされたりすることに心地よさを感じられていないように見えます。

また、これをしてねと声をかけると、「無理」「いや～」「知らん」等が第一声で返ってきます。挑発的な返答なのですが、「こっちの靴を履いたらいいよ」と言うと、「無理」と言いながら履いていたりします。何故しているのにそんな返答なのだろうと思いつつ、「そこは、無理じゃなくて、は一いつて言えばいいんだよ」と肩を落としながら伝えています。

この前も、お風呂に一緒に入っていたので、「お風呂のふたをしめてね」と言うと、「もう疲れたし、無理～」と返され、「しめてね」と言い直しの繰り返しになっていると、その会話を聞いていた中学2年生の娘が登場して、「わかった。お姉ちゃんがしめてあげるからね、はい」と言葉はやさしいのですが、明らかに怒りながらしていました。それを察知したこの子は、「あっ、あっ、しめるう」と慌てたのですが、もうふたをして出て行った後でした。後で娘の所に行くと、「言われたことはする、できれば言われる前にする。そうしないと、中学に行ってから苦労するよ」と言われていました。たかが、お風呂のふたです。実子たちも言われればしめますが、何も言われなければしめ忘れることが今でもあります。これまでは、ふたをしてと言えば、何の抵抗もなく通り過ぎるような事柄にひっきり、忍耐強く対応しないとならないのだと知りました。予期せぬところで、手間暇がかかっています。

この子は、息子や娘が言う「はい」って返事をするのですが、私や夫が言う「できない、しない」を示す言葉が出てきます。「どうして、娘の言うことは聞くのにママの言うことは聞かないんだろうねえ」と愚痴をこぼすと、娘から「それはね、ママに甘えているんだよ」と言われました。夫は、遊び上手な人です。子どもを連れて釣りに行ったり、UFOキャッチャー

でお菓子を取ったり、身体を使って相手をしてくれます。そんなパパが大好きなのが、見ていてよくわかります。私は、明日の学校の支度、宿題の確認等で口やかましくなることが多く、そこで、挑発的な返答が何回も繰り返されていくと疲れてきます。この子にとって私は求められていない、嫌われていると思ってしまいそうになります。子どもの反応が挑発的であっても、大人を頼りにしたいと思う気持ちがない子なんていないと仕事柄わかっていますが、母として追いつまれる構図は、こういうことをいうのでしょう。

この子の過去にどのような事が起きてきたのかが少し見えてくると、やり方に工夫ができ、気持ちに余裕が生まれるのだと思います。この子を養育してきた施設職員とこの子について話ができたらなと感じる時があります。一般論ではなく、この子について話をしたいのだと思います。一緒に生活し始めたこの子のこの行動が、施設の中ではどうだったのかを聞かせてもらえれば、今のコミュニケーションのやり方がこのままでいいのか、変えた方がいいのかを考える手掛かりになります。また、その職員から見てどう映るのか教えてもらえると気持ちの面で楽になれると思うのです。自分が知りたいと思った時に聞くと、貴重な情報として入ってくるものです。実際に暮らしてみても、知りたいと感じた時に話ができるととても有難いのですが、現実なかなか養育していた施設職員と話す機会がありません。

子どもにとって適切な環境下に置かれることの意味は大きいと感じているので、この子についていろいろと語りあひながらヒントを見つけていけると里親も助かりますし、子どもにも利益が起きます。里親制度は、子どものためにある制度ですから、この子を支えるために工夫をし、努力をしたらいいのです。

この子は、言われたことや経験したことをゆ

っくりと自分の中にかみ砕いて理解していく子なので、「はい」と言える場面が増え、ちょっとした表情が柔らかくなっているように感じています。

## 波紋

養育里親としての生活がスタートし、子どもとの関係での苦勞をするのだろうと予想していましたが、それ以外の事柄で悩み苦勞しています。新しいことを始めると、それに伴って今までくすぶっていた問題が、表面に出てくるようです。親戚との関係や体調面など、自分や家族に関わる様々な部分まで影響が出ています。養育里親をスタートさせる前は、子どもとの関係で苦勞していくのだろうと予想していましたが、そこよりも他の部分に対応や調整が必要になり、養育里親に直結しない部分の方がストレスを感じます。ここに労力を使うのではなく、子どものために労力を使いたいと感じますし、違う部分のストレスで、自分の気持ちが空回りして落ち込んでしまいます。

当初、心配していた高校1年の息子と中学2年の娘の揺れは、さほどありません。この子に対して自然に受け入れ、息子や娘自身のしたいことを遠慮せずに行っています。この子も、この二人に対しては比較的素直に応じているので、困ることも少ないのでしょう。児童養護施設という場で育ち、子どもと大人に対する意識に違う感覚をこの子が持っているのかもしれない。



子どもたちの揺れを感じずに済んでいることは有難い限りです。

側面からのストレスがかかると、どこかにその歪が出てきます。私の場合は、夫にいろいろな怒りをぶつけていると思います。そのきっかけとなったのは、私がどうしても子どもより早く家を出ないと仕事に間に合わない曜日があり、娘は部活の朝練、息子は通学時間が早いので頼みの綱が夫になります。夫は、特別養護老人ホーム職員なので、できるだけ夜勤明けや早出にあたらないようお願いしていたのですが、その曜日に夜勤明けが4週中3回あたっていました。何故、そのようなことが起こっているのかと尋ねたのですが、夫の方は聞いていないと言い出し、私はずっと言っていたのにと暗雲立ち込めました。私は、こんな大事なことを忘れるなんてありえないとショックを受け、しばらく夫に対して不信感を抱いていました。高齢者施設勤務ですから、思うようにローテーションが組めないこともわかります。対立するのではなく、この状況をどう調整していく方法があるか話しあいたかったのですが、そこまでに時間がかかりました。今思えば、夫の方も私と同じような状態だったのかもしれませんが。いつもの夫とは違う反応だったように思います。私と同じようにストレスにさらされていたのでしょう。人は、余裕がなくなると上手く回せなくなるものです。上手く回せないとネガティブになっていきやすくなります。側面からのストレスにさらされ続け、養育里親をすることは、そんなに責められなければならないのか、養育里親をするってそんなに悪いことをしているのかと感じましたし、何か間違ったことをしてしまったかのような錯覚にも陥りました。

何か新しい試みを開始すると、その周辺部分に波紋が起こり、子どもとの関係以外の部分での対応が必要になり、それに疲弊してしまうことが起こるのだと思います。助け合っている相

手との関係もギクシャクしてくる怖さが隠れていると知りました。

## 最後に

今回は、養育里親として生活を始めてからの戸惑いについて書いてきました。学校や友達について書こうかと思っていたのですが、この感覚を今書き留めることが大切なのだろうと感じたので変更しました。

生活していると、どんな状態であろうと日々を過ごしていかなければなりません。養育里親は、生活と仕事とが混在しているようなところがあります。仕事と割り切れませんし、生活に徹することも難しく、この子の今の状態や特性を考えながら対応していく必要が出てきます。

例えば、学校でクッキングをしてきたとわかったので、「何を作ったの？」と尋ねると「知らん」と返ってきます。「知らんではわからないなあ。じゃあそれは、何色だったの？」「茶色」「そうか、味は甘かった？しょっぱかった？」「甘かった」「もしかして、ドーナツかな」「あっ、それぞれ」となったことがあります。この会話を聞いていた娘が、「何でクッキングの内容を聞くだけなのにクイズ形式なの？」と不思議がっていました。確かに息子や娘に対して、ここまで丁寧に聞くことはできずに怒っていると思います。この子の会話の幅が広がるよという思いがあるから、会話を延ばし、違う方向からの質問ができています。これは、仕事に対する意識に近いです。

そうかと思えば、疲れてソファでうたた寝をする大人の姿を見せています。夫は、ビール好きなので晩酌をしている姿を見ながら、「父ちゃん、もっと飲んで酔っ払って」と言われています。養育里親は、不思議なものだと感じます。この割り切れなさが、生活にまつわる様々な歪

を浮き彫りにさせるのでしょうか。

児童養護施設等の施設職員でも生活との葛藤があります。職員に家庭があり子どもを養育している場合、施設職員としても家庭でも必要とされる時間帯が同じになります。子どもが起床してから登校するまでの時間、下校してから就寝するまでの時間帯です。どちらも子育てをしているのですから、当然と言えば当然です。特に女性職員は、結婚が決まったので正職を辞めることになりましたという話をよく聞きます。子育てをしたことがない年代の人が、児童養護施設等の子どもの養育を担っていると云われますが、背景の諸事情が重なっています。

子どもを護り養育すること自体が、仕事と割り切れる性質のものではありません。そして子どもは、大人と比べて圧倒的に弱い立場になります。腕力も経済力も判断力も大人より劣ります。強者である大人が、本気で子どもを護ろうとしないと、子どもはどんどん傷を深めていくこととなります。社会の大人が、圧倒的弱者である子どもを護ろうと行動しようとする人を応援することはできないでことなのでしょうか。そうではないと感じています。そのためには、社会的養護の場で暮らす子どもの背景と現実を知ってもらうことが大切なのだと思います。

新しい養育里親家庭としての生活を始めるのは、子どもも大人も余裕があるわけではありません。自分たちの生活リズムを整えていくことで必死です。何歳の子どもと暮らそうが、親としてはひよこからのスタートです。親になっていくのに近道はないのでしょうか。子どもを産んだ時も親として未熟でした。そして、現在も養育里親としての未熟さを感じています。この先、どのような出来事が起き、慌てふためくのか、泣きたくなるのかわかりませんが、この子を護っていけるよう少しだけでも応援してもらえると嬉しいです。

